
トゥインクル～輝ける空に～

ゆぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トウインクル〜輝ける空に〜

【Nコード】

N5958A

【作者名】

ゆぐ

【あらすじ】

そう、僕は変わった。いや、変わってしまったんだ。それでも、僕は信じてる。輝ける未来があることを。

プロローグ（前書き）

プロローグです。

ブローグ

「ブローグ」

キンコンカーンコン…。

「よし、今日はここまでだ。各自復習を忘れないように！」

先生の無遠慮な声が僕の耳をつんざく。

授業が終わった。嫌な嫌な、休み時間が始まる。

「おい、星川！今日は人数がたらねえから、一緒に野球やろうぜ！」
突如、大柄な少年が、一人ただ座っている少年に話しかけた。

「ええ！？いいよ…、僕は…」

少年は力なく答えた。

「ちっ！ノリの悪いやつだな。入学して1ヶ月がたつて、いつものまだ慣れねえのかよ。おい！行こうぜ！」

大柄な少年は、捨て言葉を吐きながら取り巻きを引き連れて教室を出て行った。

はあ…なんでだろう。なんでこんな僕になっちゃったんだろう。小
学校のころに戻りたいよ…。

ずっと、あこがれてた中学生。こんなはずじゃなかったのに…。

プロローグ（後書き）

プロローグなので、特に無しです。第一話へどうぞ。

第一話 お母さんとハンバーグ（前書き）

ええ、1話目ですね。今日次に続き2作目でも、あります。これは友人からの依頼の作品なんです、なかなかですよ

第一話 お母さんとハンバーグ

〔第1章 僕と母とハンバーグ〕

ざわめきの残る学校を後にした僕は、一人早い下校途中だ。本当なら、楽しみにしていた部活動をしていたはずなのに……。僕の中学校生活は、あの日から決まっていたのかもしれない。

「ただいま。」

もちろん、「お帰り、遼ちゃん」などは帰ってこない。

紹介が遅れたけど、僕は星川 遼（ほしかわ りょう）。今年から中学に入学した。

家族は、お父さんと二人暮らし。お母さんは、僕が、小学校のころに亡くなった。

病気だった。お母さんは小さいころから、病弱だったらしい。でも中学校生活はとても楽しかったそうで、死ぬ前には中学校の友達を呼び続けていたそう。これは僕のおばあちゃんから聞いた話。僕のおばあちゃんは隣町に住んでいる。それに時折、遼ちゃんと呼ぶのだ。確かに息子である、僕の名前を呼ぶのは不思議ではないが、なにか違う感じがしたそう。

僕は冷蔵庫をあけ、適当な飲み物を出してからいすに座った。リモコンをいじりながらテレビを見る。それでもこんな時間から面白い番組はやっていなかった。

「4時30分か……。」

いろいろなサスペンスはやっているものの、途中から見たって分かりやしない。

僕は、ゴクツと牛乳を飲んでから、自分の部屋に向かった。

部屋を空けると、日光が目に入ってきた。

「ん…んん。」

何をしようか迷ったが、お父さんが帰ってくるまでまだ時間があるので寝ることにした。

いつもは、宿題を済ませたり、本を読んだりするのだが、今日はやけに眠かった。

ベッドに入ると、1分もしないうちに深い睡魔が襲ってきて、自然にまぶたは閉じていった。

「遼！帰ったぞー。」

！ 突然の声に目が覚めた。 時計を見ると7時半をさしていた。

お父さんが帰ってきた。

「お帰りなさい。」

眠そうな目をこすりながら、僕は玄関に向かって歩いていった。

「おお、悪かったな。起こしたか、でももうご飯にするからテーブルに座ってなさい。父さん、着替えてくるから。」

お父さんは、そういう残すと自分の部屋に消えていった。

僕はお父さんに言われたとおり、居間に向かいテーブルに座った。

すると、3分もしないうちに、お父さんがやってきた。

「今日は、何弁当？」

「今日は、ハンバーグ弁当だ。遼、好きだろう？」

！

「食べたくない…。」

僕は答えた。お父さんは気づいてくれる。そう、信じた。

「え…！？」

お父さんはいかにも意表を突かれたという感じで、啞然としている。それに更に腹が立った。

「僕が、僕が、お母さんの作ったハンバーグしか食べないこと忘れたの！？」

僕はつい怒鳴ってしまった。

「あ…！ごめん！忘れてたんだよ。お父さん、疲れてて…。ほら、じゃあ今から買いに行こう？何でも買ってやるから。遼の食べたいやつな」

「ひと時でもお母さんのこと忘れたの？」

もうこのときの僕に自我はなかった。必死に弁解する父親が許せなかった。

僕は、必死になだめようとする父親を置いて、自分の部屋に向かった。

「おい、待て！遼！」

お父さんも怒っているらしかった。

そりゃそうだ、仕事で疲れて帰ってきて息子のために買ってきた弁当を『食べたくない』だもん…。自分が悪いのは分かっていた。今まで、育ててもらったことには感謝してる。でも、今回は許せなかった。

そんなことを考えている間に、僕は自分の部屋に着いた。そして、一目散にベッドに飛び込んだ。

「お母さん…」

ふと、お母さんの作ってくれたハンバーグを思い出した。裕福ではないうちで、時々出てくるハンバーグ…。

「遼ちゃんには大きいのをね…」

そういつて、いつも大きいのを僕にくれた。

そんなことを考えると、何故か涙が、あふれてきた。きっと、学校での出来事もあって、無性に悲しくなったのだろう。

「うつつ…お母さん…。ううわぁ…」

それでも、大声で泣くのはお父さんがいるのでまずいと思い、枕にしがみつきながら、一人、静かに泣いた。

気がつくと、朝だった。どうやら、そのまま眠ってしまったらしい。居間に向かうと、お父さんからこんな、メモがあった。

「遼へ 昨日はごめんな。お父さん、遼の気持ち何も分かってやれなかった。

ほんとにごめんな。お父さん、あれから反省した。もうハンバーグ弁当なんて買わないよ。

朝ごはんは冷蔵庫にあるから、あつためて食べてくれ。 父」

分かってる。悪いのは僕なんだ。ごめん、お父さん。

それでも、「ハンバーグ弁当なんて買わないよ」の文には少し笑えた。

「そういうことじゃないだろうっ……。」

そのあと、僕は朝食を済ませ、制服に着替え、玄関で靴を履いていた。

いつも、このときになると、気分が落ち込む。それでも今日は晴れやかだった。

「さてと……。」

玄関の鍵を閉めると僕は、学校に向かった。

なにかいいことありそうな予感がする。
なぜか心が踊った。

第二話 転校生（前書き）

第二話になりました。

今回は、文脈も丁寧な日常の何気ない話から発展させていきたいと思っています。

第二話 転校生

「おはようっ！」

後ろから、大きな声がしたので思わず振り向いた。

「なんだ…。静香か…。」

「なんだってなによー、せっかく挨拶してるのにー！」

ウサギが噛み付くように、この女が言った。

彼女は、花井静香。はいしずか

僕の近所に住んでる、いわゆる幼馴染というやつだ。

いつも元気でテンションが高く、顔も可愛いので男の子からも人気がある。

クラスは別々になったが、家が近いのでこうやって時々会った。

「ねえ、学校は楽しい？」

「えっ？」

ふいに、質問が飛んだので僕はあせってしまった。

「うん。楽しいよ。毎日学校に行くのが楽しみ。」

嘘をついた。いや、つかざるを得なかった。

だって 彼女の前であんなこと…言えるはずもなかった。

「それなら、嬉しいな。私もね、毎日が楽しくて！」

太陽のようにまぶしい笑顔で話す天使に、僕の胸は針が刺さったように痛んだ。

あの後僕は、学校まで彼女と行って、その後、昇降口で別れた。

クラスが別々だから、理由であったが、彼女が僕と学校に行ってるなんて知れたら、彼女に迷惑がかかるに違いない、そう思ったのだ。

「じゃあここで。」

「え…、あ、うん。またね。」

そう話す彼女の顔は悲しそうにも見えたが、別に気にしなかった。彼女と別れて歩いた廊下は、太陽をなくしたように冷え切っていた。

キーン、コーンカーンコーン…。

チャイムと同時に先生があわただしい様子で入ってきた。

「おはよう、みんな！さっそくだが、今日はいいい知らせがある。」
そういうと先生は、廊下に向かって手招きした。

「ささっ…おいで」

すると、可愛いセーラー服を着た子が、緊張した面持ちで入ってきた。

「今日から、君たちの仲間になる三波^{みなみ} 良子^{よしこ}さんだ！お父さんの仕事の都合で、わが中学校へ転向してきた。みんな、仲良くしてあげなさい！」

中学校にもなつてそんな説明は要らないだろう…と、思った。でもおかしいな。普通、転校生なら入学式の日になればいいのに…。

「席は…、そうだな。星川の隣が空いてるな。ささっ、あの空いている席だ。」

先生は優しい口調で促した。

「えー、星川の隣かよー。」

「可愛そうよー。」

そんな罵声が飛んでいたがもはや僕には気にならなかった。

良子と名乗るその女性が、僕の近くまでやってきて軽く微笑んだからだ。

近くで見ると、本当に可愛い。なにか懐かしい印象も受ける。母性本能をくすぐるというか…。

ガタッ！

席に着いたとき、僕の心の音符はドからシまで高鳴った。

でも、ただ興奮しているというわけではない。

なにかを感じさせてくれる女性だった。

しかし、その思いも一瞬のものだった。

ホームルームが終わると、男子、女子関係なくみんなが良子さんのところに来たからだ。

そして、いろいろな質問を浴びせている。良子さんも困ったような顔をしながらも、丁寧に返答していた。そのおかげで僕も周りのやつらからちよっかい出されることもなかった。

その日は一日がものすごく早く感じた。

なにか、早く感じたのだ。

気がつくと、下校途中だった。

「あら、遼じゃない？」

聞きなれた声だ。

「おっ、静香か。」

声のトーンが高い、さすがにこれはまずいと思った。

「なにか、幸せそうね。そんなに転校生が来たのが嬉しいの？」

鋭い声で問い詰められ、僕はたじろいだ。

「うるさいな……。関係ないだろ。それより部活はどうしたんだよ？」

話を転換する作戦だ、これはわれながらよい作戦だと思った。

「ああ、今日は休みなの。あんたこそ、部活は？」

「僕も休みなんだよ。」

「野球部練習してたわよ？」

「自主休暇！」

僕は思わず大きい声を出してしまった。話を変えるつもりが逆に痛いところを突かれてしまった。

「あらそう……。でもサボってばかりじゃだめよ。先輩厳しいみたいだから。」

「分かってるよ！」

僕はそっくり残すと、その場を去っていった。

「バカだな……。なんで言い争いになっちゃうんだろ……。なんで、も

う少し優しくしてあげられないのかな…。一番辛いのはあいつなの…。」

静香が、ゆっくりそう呟いた。

「ただいまっ！」

僕はそう怒鳴るなり、玄関の戸を開けてかばんを放り投げた。

そして、一目散に自分の部屋に向かった。

「ちえ…、せつかくい気分だったのに台無しだよ…。人の事情に首突っ込むなよ…。でもあいつ…僕のこと心配してくれてるんだろうな。ちよつと、言い過ぎちゃったかな。」

そう後悔した。そんな後悔で昨日のお父さんに対する行為もよみがえってきた。そして、一つの提案を思いついた。

お父さんの為に、ハンバーグを作ってあげよう！

自分でも意外な提案だった。あんなに昨日までハンバーグの事で怒ってたのに…。ないたことで吹っ切れたのかもしれない。もう甘えではだめなんだ。そう、考えた。

早速、本棚から料理に関する本を出した。お母さんが使っていたやつだ。今も大事にしまったある。本を出したときにかすかにお母さんの香りがして、また涙がこぼれそうになったが、さっき甘えてちゃだめって決めたばかりじゃん。と、考えて持ち直した。

幸い、材料はそろっていた。早速、本を見ながら始めた。

作り始めて30分がたととしたころ、2つ分のハンバーグが出来た。後はこれを焼くだけだ。

こう見えても、お父さんと2人暮らしになってからは度々、夕飯を作っていたのでそれなりに料理は出来た。なので、ハンバーグもなかなかの出来だと自負した。

お父さんが帰って来るまではまだ時間があるので、帰って来る直前に焼こうと思った。

焼きたてのほうがおいしいと思ったからだ。

お父さんの喜ぶ顔見たいな！昨日のことでも誤らなくちゃ！
そう思っていた。

第三話 お弁当（前書き）

第三話です。相変わらず、更新遅いでよね。

第三話 お弁当

「そうだ！明日の弁当に小さいのを作っておこう！」

なかなか、いい提案だ思った。いままでがうまく作れたので、調子に乗ったのかもしれない。

慣れた手際で、小さいのを1個、2個作っていった。

日も西に傾きかけ、鮮やかな夕焼けが遼の家を包んだ。そうこうしているうちに、お父さんの帰ってくる時間になっていた。

「やつばい！焼き始めないと、お父さん帰ってきちゃう！」

僕は再び本を開き、温度、時間等を確認した。そして、先程作った二つの大きな宝石をフライパンに乗せた。

「よっし！」

僕の胸は高鳴った。

ジュー……。火をかけ始めたとき、玄関から声が聞こえた。

「ただいま！」

お父さんだ！

スタッ… スタッ…。

足音が聞こえる度、緊張が大きくなる。

そして…、ドアが開いた。

「あつ、お父さん！お帰りなさい。今ね、ハンバーグ作ってるんだ！食べてくれるよね？」

先手を打った。

「遼…、もちろんだ！そうか、遼が作ったのか！嬉しいな！」

父は驚きつつも、嬉しそうな顔をした。

「もう少して、焼き上がるから着替えてきて。」

「おう！」

お父さんが部屋に向かうのを確認してから、胸を撫で下ろした。
「ふう。」

「さて…、頂きます！」

お父さんはそう行つて、口に入れた。

「どうかな？」

ドキドキしながら、聞いてみる。

「うん…、うん…、おいしいよ！母さんとまではいかないが、すごく似た味だ！さすが親子だな！」

「ほんと！？よかったー。」

僕はお母さんと同じ味を目指して作っていたので、とても嬉しかった。

その後、二人はあつというまに夕飯を平らけた。

翌朝、僕はお弁当にハンバーグを詰めていた。

「んしょ…、んしょ。」

入るだけ、いれた。

「あつ！もう、こんな時間だ！」

お弁当に一生懸命になりすぎて、時間のことなどすっかり忘れていた。

「いつてきまーす！」

僕は鍵を閉めて家を後にした。

今日一日はみんなあまり良子さんには近づかず、数人の子としゃべっていた。

時々見せる笑顔に僕の胸は赤く染まる。

「ねえ…、遼く、くん？私、今日ね、教科書忘れたの。見せてくれない？」

いきなりの問いかけに僕は驚いたが、喜んでOKした。

（言うまでもないことだが…。）

「ありがとう。」

遠慮気に話す彼女の顔は、なんとも可憐だった。

4時限目の授業も終わりに近づいたところだった。

「ねえ、今日一緒に屋上でお弁当食べない？」

え　？僕に言ってるの？いや、そんなはずは…。

「あ、ゴメン！いきなり迷惑だよ…。遼くん…。」

遼くん？リョウくん？僕の名前は？

星川　遼　。

僕のこと？

今僕は、屋上に向かう階段を登っている。

隣には、良子さんが　。

現実味が沸いてこないが、一緒にお弁当を食べることになったらしい。

僕たちの学校では、お昼時間の間屋上を開放し、そこで弁当を食べてもいいことになっている。

屋上は広いが、そんなにたくさん的人是来ない。

要するに二人きりだ…。

今、そのドアを開けた。

太陽に日差しが眩しい。風はほとんど吹いていなかった。やっぱり、人はたくさんいない…。

「あのへんで食べようよ！」

僕が大体の位置を決めた。

「うん！」

僕たちは、手ごろなベンチに座りそれぞれの弁当箱を開けようとし

ている。

そういえば…ハンバーグ入れてたんだ。今頃、思い出した。ばかり…。

良子さんのお弁当は、鮮やかだった。色もきれいで、おいしそうだ。良子さんは、僕の弁当箱を見たとき少し表情を変えた。

「…、おいしそうな、ハンバーグだね。1個もらってもいい?」
「いいよ!僕が作ったんだ!」

自慢げに話した。そのとき、良子さんの顔がほころんだ。

「ほんとに…!?嬉しい!」

ぱくりと食べると、良子さんは満面の笑みを浮かべた。

「おいしい!遼くんって料理上手なんだね。」

「そ、そうかな。喜んでくれると僕も嬉しい…!」
照れ気味に話した。

その後は、いろいろな話に花を咲かせたのだが、ついにあの話になった。

「遼君って、何部に入っているの?」

「え…?あの…野球部。」

少したじろいながら答えた。今は練習に行っていないからだ。

「へえー、すごい格好いいね!ポジションはどこ?」

目を輝かせながら聞いてくる良子さんに僕はうそをつけなかった。

そして、なにより彼女には何の話をしても大丈夫だというような妙な安心感があつた。

「実は…今は練習に行っていないんだ…。その…先輩からいじめられて…。」

彼女は驚いた顔をした、そして優しい声で聞いた。

「あ、ゴメンね。辛いこと聞いちゃって…。もしかして、それでクラスの人にも…。」

?

知っていた?確かに知っていてもおかしくはない。

でも、なんで僕がクラスでも浮いていることを知っていて弁当に誘うのだろう？

でも僕は平常心だった。

「そうだよ。先輩の権力は強いから…。みんなして、僕を…」
「でもなんでなの？なにをしたの？」

僕は逃げられないと思った。でも、やっぱり妙な気持ちだった。嫌われてもいい…、疎外されてもいい…、それでも…

全てを話したかった。僕の悩みを聞いてほしかった。

第四話 想いそれぞれ（前書き）

大変遅れました。

申し訳ございません。

第四話 想いそれぞれ

「僕の…、話を聞いてくれる？」

僕はささやくように聞いた。

「もちろんよ、何でも話してみてもいいよ。」

彼女の穏やかな笑顔に僕は決心した。

ふと、風がやさしく吹いた

あれは、僕が入部してすぐだった。

そう、部長が1年生の実力を見たいからとかで…、僕たちは、各テストをやらされた。

僕は小学校の頃からやっていたから、みんなより抜群にうまく出来たんだ。

ひよつとすると先輩たちよりうまくいったかもしれない…。

僕は喜んだ。

でも…やっぱりそれを快く思わない先輩もいた。

その先輩たち何人かに取り囲まれて…友達と思っていた同級生も敵になった。

やっぱり、先輩には敵わなかったんだろうね。

「もう、来るな。お前がいると、俺たちも試合に出れなくなる！」と、そう言われて…。

それ以降、部活に行っていない…。

怖いんだよ。部活だけじゃなくて…僕の日常生活が壊れていくのが…。

それでも、やっぱり変わっていった。

僕はクラスでも一人になってしまったんだ。

それは君も知っているよね。

そこまで一気に話し終わった。

僕は緩やかな開放感とともに、これで彼女がどう思うのか心配になった。

すると、ゆっくりと彼女の口が動いた。

「それは、可愛そうだね…。でも、君だって何からも逃げているんだよ？そのままじゃ変わらないよ、何も。」

強い風が僕らを揺らした。

「なんだよ！お前に何が分かるってんだよ！僕だって努力したよ…！それでも…！」

僕は、怒鳴ってしまった。自分のした事に気づき彼女に謝ろうとしたとき、そこにもう良子さんの影はなかった。

その後のことはよく覚えていない。

普通に授業を受けて家までまっすぐ帰った。

途中、静香が声をかけてきた気がしたが、全然反応も出来なかった。

ただ、自分のしたことを悔いていた。

次の日の学校に彼女の姿はなかった。風邪を引いたらしい。

謝ることも出来ない。

クラスをやつらがちっかいをかけてきたり、ふざけて殴りかかってきたりしたが、全く何も感じなかった。

それでも昼休みに静香が来てくれたときは、少し嬉しかった。

「遼？最近元気ないけど、どうしたん？」

「なんでもないよ、それより静香も元気？」

本当になんでもないよ、という口調で話した。

「うそ…！うそでしょう！？なんで、私に隠すの？遼が嘘をついてるかどうかなんか見れば分かるよ…、何年の付き合いだと思ってる

の!？」

せき立てるように詰められた。久しぶりに聞く静香の怒鳴った声に、僕は少し驚いた。

「だって、ゴメン…。全部、話すよ…。」

僕は、部活のこと、クラスのこと、良子さんのこと…すべてを話した。

「ありがとう…、話してくれて…。ゴメンね。遼が苦しんでるのに気づいてあげられなくて…。それと…良子ちゃんの家に行きつてみたら? お見舞いにでも…。」

静香が良子の話を出したのは意外だった。僕が一番話したくないことだったのに…。

「うん…、そうするよ! ありがとう。」

僕はそういつて教室に戻っていった。

幼馴染もありがたいんだな。

「また、言えなかった…。遼にアドバイスすることしか…。なんで気づいてくれないの? 私のこの思い…。」

静香が一人遠くへいく遼を見てつぶやいた。

僕はその日、良子さんの家に行った。

あんまり行ったことのないところだったから、住所を聞いても分からなかった。

それでも、周りの人に聞いて何とか着くことが出来た。

良子さんの家は、なんだか懐かしい感じのする家だった。

「よし…!」

僕は意を決して、家に入ることを決めた。

「失礼します。」

「あら、いらつしゃい。良子のお友達かしら?」

やさしい口調で話す、おばさんはとても好感の持てる人だった。

「はい、あのー、良子さんはいますか? 少し会いたいんですけど…。」

「2階にいるわ。今はすっかりよくなってるから行ってあげて。きつと喜ぶわ。」

僕はその言葉を聞いて、階段を上がっていた。心臓はドキドキしている。

「こんにちは。良子さん元気？」

ドアをあけて、先手必勝で話しかけた。

「あつ、遼くん？来てくれたのね。嬉しい！」

良子さんは、一瞬戸惑いながらも笑顔で迎えてくれた。それからいろんな話をした。

良子さんも、元気そうに僕と…、そして楽しそうに話してくれた。それでも、病人なので大方の時間に帰ることにした。

「ねえ、今日は何ももってこれなかったけど何か欲しいものある？」

「ハンバーグ…。あのハンバーグもう一回食べたいな！」

その答えに一瞬僕は戸惑った。

「え？そんなものでいいの？それなら明日持つてくるよ。」

「本当？嬉しい…！私、明日も念のために学校休むから持つてきてくれる？」

小さな少女のように話す彼女に、僕はあきれながらも心が躍った。

「もちろん、同じ時間に来るね。」

僕はそう言い残して、良子さんの家を後にした。

明日のために帰ったらおいしいハンバーグ作らなくちゃな。

そう思う遼の体を夕焼けがきれいに染めていた。

最終話 トウインクル（前書き）

最終話になりました。

大体、自分が考えていたぐらいで終われましたね。
後書は別に書きますので、ご覧になってください。

最終話 トウインクル

「よいしょ！」

うん、うまく出来た。

これなら、きつと分かってもらえるよ。

だって、僕は彼女に心を許せることが出来た。
だから、きつと伝える。

「本当の僕のキモチ、

もし、仮にそれが駄目でもそこに後悔はない。だって、自分に嘘は
つけないから。」

僕は翌朝、ゆつくりと学校に向かった。

急いでもしうがなしいし、何より僕には…緊張感がある。

しかしそんな思いも簡単ではなかった。

学校では、更にいじめがエスカレートしてきた。

僕が最近無視していたからだ。

「おい、遼よう、最近元気じゃねえかよ。いいことあったのか？」

「な、なんでもないよ。なんか用なのかよ。」

「あの女…。良子とできたのか？」

いかにも、意地悪く笑いそういうクラスメートに、僕は少し動揺し
た。

「なつ、何言ってるんだよ！そんなはずないだろ！」

僕は怒鳴ってしまった。「はっはーん、なるほどなるほど。そーい
やあいつ昨日も学校休んでたよな？お前ら二人でなにかやってるん
じゃないのか？」

この言葉の僕はキレた。

「ふざけるな！良子さんを悪く言つな！」

バキィ！鈍い音が響いた。

僕は一瞬意識がとんだ。

「俺にキれるなんていい度胸してんじゃない。それなりの覚悟はあるんだろうな？」

ふらふらする…。でも誰かが上から僕を見下ろして何か言っている。

「殴るなら…殴ればいいだろ！今日は逃げないぞ！」

僕の心には良子さんの言葉が鳴っていた。

「な、なんだよ…。殴れって言われて殴れねえよ。俺が悪者みたいじゃねえか…！」

相手の顔は何故か、あせっていた。

「かつつ…。」

「はあ…！？」

「明日からは部活行くからな！先輩だつて恐くない…！」

僕には話すことしか出来なかった。それでもしっかりと言葉は発していた。

「好きにすればいいだろ…！」

はき捨てるように聞こえた。

僕はその場に立っていた。

僕は変わったんだ。もう逃げない…。だつてまだ、未来がある。

これから、良子さんみたいな人に会うかもしれない。

部活で何回も優勝するかもしれない。

僕は僕の未来をつかむ。

そして、僕は良子さんの家の前にいた。

ピンポン…。

「はぁーい。」

「こんにちは。遼です。」

僕の声は不思議と震えていなかった。

「あ、毎日悪いわね…。2階にいるわ。」

さて…、僕は玄関の扉を開け、階段に足をかけた。もう、迷いも距離もない。

「こんにちは、元気？」

「あ、遼くん！わざわざ来てくれてありがとう！」
にこりと笑う。本当に可愛いなあ…。

「ハンバーグ焼いてきたよ！食べてみて！」

「うんっ！嬉しい！」

すると彼女は、パクリと食べた。

彼女は笑った。

そして 涙を流したのだ。

「え？どうしたの？まずかった？」

僕はあわてた。塩を砂糖を間違えたかなとも思った。

「遼…ハンバーグおいしいよ、ありがとう。私と同じ味…。」
え？

私と同じ…？

遼って…？

「え、どういうこ…」

そこまで言葉が出てきてハッとした。

よしこさん？良子さん？

もしかして…、りようこさん…！？

それって…、おかあさん？

僕の頭は真っ白だった。

「そうよ…、私の名前はりようこ…。苗字は変えてあるけどね。少しの間この現実世界に来てたのよ…。ゴメンね…。母さんは知ってる。あんたの本当の気持ちも…。騙してたわけじゃないのよ。だって、ばれると…。」

母さんの体が消えかかっている。

「母さん！？体が…。」

「そろそろ、お別れみたいね…。ばれちゃったし…。」

母さんの目からは涙が流れていた。

僕も目頭が熱くなってきた。

お別れ？

何で？

「そんな、嫌だよ！お別れなんて…！それに僕は…！」

「そ、その先は言っちゃ駄目よ。ごめんなさいね。もう一度だけあなたと会ってみたかったの…。でも、その思いはだんだん変わっていったわ…。私、三波 よしこは、あなたを…。」

僕はさえぎった。

「その先は言っちゃ駄目なんですよ？」

僕も目から涙がこぼれた。

「ふふ、そうね…。もうそろそろ時間だわ…。遼…いや、遼くん…今までありがとう。」

「かあ、いや、よしこさん！駄目だよ、いなくなっちゃ…。僕また一人だよあ…。」

そついう僕のよしこさんは、優しくささやいた。

「大丈夫よ…。あなたは誰よりもやさしくて純粋な心を持つてる。

幸せかどうかなんて、人にわかるもんじゃないのよ。それなら、自分は幸せなんだと思って生きなさい。それが一番すばらしいことなのよ…。」

ふっ…。

僕は目の前が真っ白になった。

気がつくと僕は良子さんの家があった場所にいた。空が輝いていた。それは、太陽の光などではない。きっとこれは良子さんが残してくれたもの。僕の行き場を指し示す希望の道。でも、それは自分の足で歩いてゆかなくちゃ。

でもそこに家はなくなったあの空き地だった。もともと家などなかったのだ。

目の前にはハンバーグを入れた弁当箱…。

僕の心は、澄んでいた。

もう、何も怖くなかったし、すべてを受け入れられる。

「今なら言ってもいいよね…？母さん、いや、よしこさん？」

僕はそっとささやいた。

「好き…だよ。」「

後書

初めての恋愛小説を書かせていただきました。
どこが恋愛？と思われる方もいるでしょう。

今回は自分の腕が、あまりにも未熟でした。

しかし、自分で書ききった以上掲載することを決めました。

やはり初期の作品は、今後の自分のためになりますしね。

各登場人物のキャラ性もはつきり書くことが出来なかったし、遑に
ついても掘り下げて書くことが出来なかったのは悔しいです。

もっと、学校やクラブのことも書きたかったですね。

それと、静香との関係が中途半端になったこと……。これは読者の皆
様の想像によって完成されるものの一番の要素かな。

創造を膨らませて、自分だけの物語を作ってください。

それでも、最終回まで持つていけたことは嬉しいです。

しかし、これを作品と呼ぶには酷いと思います。

自分でも分かります。でも、「会話だけで進む小説もどき」を書く
ことは防げたので、最低限のことはやれたかな」と。

関係ない話ですが、

今後の予定は、まず今日次の完結が目標です。

大体の指針は決まっていますので、そんなに時間はかからないでし
ょう。

あちらはファンタジーということで、こちらとは一味違ったものが
感じられると思います。

またその後の思いつく限り作品を出して生きたいと思います。

以上、トウインクル〜輝ける空に〜でした。

この作品に目を通していただいた事を心から、感謝いたします。
この作品を読んで、心に響くものがあればいいなと思います。

今後もよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5958a/>

トゥインクル～輝ける空に～

2010年10月28日07時56分発行